

宝治元年『院御歌合』注釈―「五月郭公」題―

位藤邦生 藤川功和

はじめに

「広島大学大学院文学研究科論集」第66巻（平成18年12月）に引き続き、宝治元年（一二四七）『院御歌合』の注釈を試みる。今回は「五月郭公」題十三番を取り上げる。注釈は、広島大学中世文芸研究会における輪読をもとに、位藤邦生と藤川功和が再検討したものである。輪読時の各番担当者と所属を以下に示す。

二十七番―藤川功和、二十八番―濱口好太郎（文学研究科博士課程前期）、二十九番―堤登志江（文学部三年生）、三十番―高田哲治（文学部二年生）、三十一番―流郷織江（文学部四年生）、三十二番―山口正代（文学研究科博士課程後期）、三十三番―新居和美（同）、三十四番―相原宏美（同）、三十五番―中村聡子（文学部四年生）、三十六番―藤川、三十七番―豊田宮子（文学研究科研究生）、三十八番―竹中さやか（文学部四年生）、三十九番―位藤邦生

凡例

- 一、底本は、群書類従本（巻第二百所収）を用いた。
- 一、校合した諸本と略号は、以下の通り。
 - （書）―書陵部蔵本〔五〇一・七四〕（『新編国歌大観』の底本）
 - （聚）―書陵部蔵歌合類聚本（『大日本史料』第五篇二十四所収）
 - （永）―永青文庫蔵本〔二〇七・三六・七〕（『細川家永青文庫叢刊』第八巻所収）
 - （内）―内閣文庫蔵本「百三十番歌合（外題）」〔二〇一・二四七〕
 - （支）―九州大学支子文庫蔵本〔九一一・ホ・一〕
- 一、注釈は、番全体の本文【校異】を示した後、【他書所伝】【本歌】【語釈】【通釈】をあげた。
- 一、【語釈】の内、各詠作者並びに前号既出の語彙については、紙幅の関係上これを略した。
- 一、表記や送り仮名の異同はこれを略し、見せけちや補入符号によって訂正のある箇所は、訂正後の本文を採用した。
- 一、翻字本文には適宜読点を施し、字体は現行の活字体に改めた。
- 一、本文中、異同の存する箇所には、傍線及びイ、ロ、の如き符号を付し、語釈を施した箇所には、本文右傍に①、②…の通し番号を付した。
- 一、底本で文意不通等が認められる場合、他本の本文に抛り通釈を施した場合がある。その際、本文【校異】【通釈】において他本

に拠った箇所にも網掛けを施した。

一、引用本文は、原則として『新編国歌大観』に拠り、その他の引用文献は、適宜底本を示した。

一、引用本文には、適宜、傍線、振り仮名等を付した。

〈二十七番〉

廿七番 五月郭公

左 刪

女房

里^トなれて今そ鳴なる時鳥^ト五月を人はまつへかりけり

右

小宰相

を^④のか妻いかに契れる郭公^ト五月の空を分てとふらん

左歌里なれて今そなくなるとで、五月を人は

まつへかりけりと侍る、心姿ことに珍しく、ほとゝ

きすの古声もかく侍りけるものを、まことの秀逸^ト

にこそ侍らめ、右歌^トさしたる難には侍らねと、をの

か妻、あつまやから衣などはなくて、五月の空をわき

てとふらんといへる、ことにより所なく聞え侍れは、

猶^ト以左為勝、

【校異】

イ 勝―ナシ(書) ロ ナシ―続後撰、夏(聚)、続後撰(永)

ハリ―む(内)、る(支) ニ る―は(書)(永) ホ て―也

(支) への―ナシ(書) ト の―に(聚) チ 逸―^{*}■(内)

※■は「速」とよめるかり歌―ナシ(聚) 又は―ナシ(支)

ル なく―なれ(書)(聚) (永)(内)(支) ヲ ―ナシ(書)(聚)

【他書所伝】

〔左歌〕

『続後撰和歌集』巻第四・夏歌・二〇〇

十首歌合に、五月郭公といへる心をよませ給うける 太上天皇

さとなれていまぞなくなるほととぎす五月を人はまつべかりけり

『新三十六人撰』三五

(太上天皇御製後嵯峨院)

里なれて今ぞ啼くなるほととぎす五月を人はまつべかりけり

〔右歌〕ナシ

【語釈】

①五月郭公―郭公は五月頃(旧曆四月)渡来、繁殖し、8、9月頃

南方に帰る渡り鳥。和歌の世界では、「さ月まつ山郭公うちはぶき今

もなかなむこそこのふるごゑ」(『古今和歌集』巻第三・夏歌・一三七

・よみ人しらず)に代表される如く、五月は、それまで山にいた郭

公が人里に下り本格的に鳴く時候とされる。

②里なれて―郭公が、深山から人里へと降りて、徐々に人慣れて鳴

くようになる様をいう。「あしひきの山郭公さとなれてたそかれ時に
なのりすらしも」『拾遺和歌集』巻第十六・雑春・一〇七六・大中
臣輔親)等がその例。

③五月を人はまつへかりけり―「こがくれてさ月まつとも郭公はね
ならはしに枝うつりせよ」『後撰和歌集』巻第四・夏・一五九・伊
勢)等の如く郭公が五月を待つ、或いは「宮人ねでまつらめや郭
公今ぞ山べをなきていづなる」『拾遺和歌集』巻第二・夏・一〇二
・藤原道綱母)、「さみだれはいこそねられね郭公夜ぶかくなかむこ
ゑをまつとて」『拾遺和歌集』巻第二・夏・一一八・よみ人しらず)
等の如く視点人物が郭公(の鳴き声)を待つという詠が古来多くみ
える。一方当該歌の如く視点人物が(郭公が盛んに鳴く季節である)
五月を待つという先行例としては「郭公卯花かげの忍び音にわれも
五月の空ぞまたるる」『正治後度百首』夏・郭公・四一六・藤原隆
実『信実』等があげられるがそれほど多くない。

④をのか妻―郭公を擬人化した表現。「たびにしてつまこひすらしほ
とどぎすかむなびやまにさよふけてなく」『万葉集』巻第十・夏雑
歌・一九四二、『後撰和歌集』巻第四・夏・一八七』は初句「たび
ねして」等の如く、妻を恋いつつ鳴く郭公を詠む例が古来みえる。

⑤空を分て―「分て」は、空を分けての意ととりわけの意。「わび人
のわきてたちよるこの本はたのむかげなくもみぢちりけり」『古今
和歌集』巻第五・秋歌下・二九二・遍昭)は後者の例歌。

⑥ほととぎすの古声―郭公の鳴き声の慣用表現。「さ月まつ山郭公う

ちはぶき今もなかなむこそこのふるこゑ」【語釈】①既出)の如く「去
年と同様」、また「ほととぎすなきてよにふるこゑをだにきかぬ人こ
そつれなかりけれ」『斎宮女御集』九八)等と「以前と変わらぬ声」
と詠まれる場合が多い。

⑦をのか妻、あつまやから衣などはなくて―難解。「をのか妻」とい
えば伝統的には催馬楽「東屋」(それを用いた『源氏物語』東屋巻)
や「唐衣」(それを用いた『伊勢物語』第九段「から衣きつつなれに
しつましあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ」)等がなだらかな連想
を誘うものであるが、そうした伝統的な修辭が欠けていることを指
していると思しい。初句「をのか妻」は既に『万葉集』からみえる
が、これを「わが妻」としないで「をのか妻」とした背景には、二
十九番以降に頻出する「をのか五月」の典拠となった良経の歌等へ
の連想が働いているだろうか。

⑧より所なく―ある表現を用いる必然性に乏しいことを指す。当該
歌の場合、上の句「をのか妻」と下の句「五月の空を分てとふらん」
の結びつけが唐突で、二つの表現を結びつける必然性に乏しいこと
を難じていると思われる。

【通釈】

二十七番 五月の郭公

左(歌) 勝

女房(後嵯峨院)

山から出てようやく人里に馴れ今まさに鳴いている郭公よ。(郭公
の盛りの声を聴く為に)五月を人は待っていた甲斐があったのだな

あ。

右(歌)

(承明門院) 小宰相

おのが妻にどのようなに約束をしたので、郭公は今五月の空を裂いてわざわざ飛んでいるのであろうかなあ。

〔判詞〕左歌の「里なれて今そなくなる」といって、「五月を人はまつへかりけり」とあります、(一首全体の)心や姿は特に珍しく、郭公の古声も(たしかに)この(左歌の)ようでありましたので、まさに本当の秀逸(の歌)でありましょう。右歌は大した難点ではありませんが、「をのか妻」(と詠み、しかし)、「東屋」「唐衣」などは(表現し)なくて、「五月の空をわきてとふらん」と言っているのは、特に表現の必然性に欠けるように思われますので、やはり(この番は)左歌をもって勝ちとする。

〈二十八番〉

廿八番

左^イ 太政大臣

我のみとなくやさ月の時鳥たれもね覚はよそにやは聞

右

俊成卿女

かたらひし宿の軒はの橋にさ月ことふほととぎすかな
我のみとなくやさ月とて、誰もね覚はよそにやは

きくと侍るこそ、老の後はことに夏の夜もわか

ぬね覚、ことよろしく聞なされ侍れ、かたらひしといひて、さ月ことふと侍るもおなし心にて、聞ふる
されにたれ

【校異】

イ 勝—ナシ(書) 口 は—を(書) ハ とて—の(聚)

(内) ニ ことに—まことに(書)(永) ホ わかぬ—有ぬ(支)

へ なされ—なれ(内) ト かたらひし—右かたらひし(永)、か

たらへし(支) チ ことふ—斗とふ(永)、ととふ(支) リ

されにたれ—されにたれはまた左かち侍へし(書)、されたれは又左

勝侍へし(永)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【参考歌】

〈右歌〉

『源氏物語』花散里・一六八・光源氏

橋の香をなつかしみほととぎす花散る里をたづねてぞとふ

【語釈】

①我のみとなくやさ月の時鳥—類例として「とふ人もなきふるさとのたそかれにわれのみ名のるほととぎすかな」『待賢門院堀河集』

一四、「おのづからとふ人もなきみ山べに我のみなるほととぎすかな」『宝治百首』夏十首・関郭公・八八九・西園寺公相）等があげられる。

②かたらひし宿の軒はの橋に—『源氏物語』花散里巻で、光源氏は昔情を交わした中川のあたりの女に「をち返りえぞ忍ばれぬほととぎすほの語らひし宿の垣根に」（二六六）の歌を贈る。当該歌は【参考歌】にあげた光源氏詠とも表現の一致をみせており、おそらく花散里巻を踏まえて、恋の情趣を込めた一首に仕立てたものであるう。

③老の後はことに夏の夜もわかぬね覚—左歌の歌中の「ね覚」を老いの寝覚めと解しての評。時鳥の鳴き声と老いの寝覚の先行例としては、「ききつるやはつねなるらんほととぎすおいはねざめぞうれしかりける」（『後拾遺和歌集』第三・夏・一九六・法橋忠命）、「あけがたにはつねはききつ時鳥まつとしもなき老のねざめに」（『月詣和歌集』巻第七・雑上・七二六・兵衛）等があげられる。なお、為家にも「鳴きふるす涙たづねてほととぎす老のねざめにはつねなくなり」（『為家集』上・夏・四六七）等がみえる。

【通釈】

二十八番

左（歌） 勝

太政大臣（西園寺実氏）

悲しいのは自分だけだと鳴く（泣く）のか、五月の郭公よ、（老いの）寝覚めには、お前の鳴く声を誰が他人事だと聞いていられようぞ。

右（歌）

（以前）語らった宿の軒端に橋（がまた咲いて、この）五月に声をかけて来る郭公であることよ。

「判詞」「我のみとなくや五月」と言つて、「誰もね覚めはよそにやはきく」とございますのは、老後は特に夏の短夜もわかまえない寝覚め（という趣向が）、とりわけ優れていると理解されます。「かたらひし」と言つて、「さ月こととふ」とございますのも同様の内容で、ことに新しさはないので又左勝でございます。

〈二十九番〉

廿九番

左

権大納言通忠

立花のにはふさ月の時鳥いかに忍ふるむかし成らん
右 勝 権大納言実雄

折はへてなげや雲ちの時鳥いまはたをのかさ月きにけり
左右ほととぎすいつかたと聞わかれ侍らねと、いかにしのふるといへるよりは、今はたをのかといへるは、みんにとまり侍るへくや、

【校異】

イ ナシ―続拾、夏(聚) □ 勝―ナシ(書) ハ 左右―左右
の(書) ニ わかれ―わかす(支) ホ ふる―ふ(聚)
へるは―る(書) ト とまり―とまり(永) チ 侍るへく
や―侍ぬへくや(書)、侍ぬへくや(永)

【他書所伝】

〈左歌〉

『続拾遺和歌集』卷第三・夏歌・一七七

宝治元年十首歌合に、五月郭公 右近大将通忠

たち花のほふ五月の郭公いかにしのぶるむかしなるらん

『秋風抄』上・夏歌・三六

院御百首に、五月郭公 右大将通忠

橋のほふ五月の郭公いかにしのぶるむかしなるらん

『秋風和歌集』卷第三・夏歌上・一七五

十首の歌合せさせたまける時、五月郭公といふことを

右近大将通忠

たちばなのほふ五月のほととぎすいかにしのぶるむかしなるらん

『和漢兼作集』卷第四・夏部上・四四四

五月郭公 右近大将源通忠

たちばなのほふ五月のほととぎすいかにしのぶるむかしなるらん

『題林愚抄』第五・夏部上・二〇七二

続拾

右大将通忠

橋のほふさ月のほととぎすいかにしのぶるむかしなるらん

〈右歌〉

『題林愚抄』第五・夏部上・二〇七四

宝治歌合 実雄卿

をりはへてなげや雲ちの郭公今はたおのが五月きにけり

【語釈】

①立花のほふさ月の時鳥―橋の香と時鳥の取り合わせは、「たちば
なのほへるかかもほととぎすなくよのあめにうつろひぬらむ」『万
葉集』卷第十七・大伴家持・三九三八)等古くから見いだせる。

②いかに忍ふるむかし成らん―橋と郭公の取り合わせに、著名な「さ
つきまつ花橋のかをかげば昔の人の袖のかぞする」(『古今和歌集』
卷第三・夏歌・一三九・よみ人しらず)を加え、郭公を擬人化して
一首に仕立てたもの。

③折はへて―長く続ける意。「あしひきの山郭公をりはへてたれかま
さるとねをのみぞなく」(『古今和歌集』卷第三・夏歌・一五〇・よ
み人しらず)、「たがみそぎゆふつけ鳥か唐衣たつたの山にをりはへ
てなく」(『古今和歌集』卷第十八・雑歌下・九九五・よみ人しらず)
等が早い例。

④雲ちの時鳥―雲路は「雲の通ひ路」の短縮形と考えられ、雲の立
ちこめた空を飛ぶ郭公の意。先行例として、「里わかず鳴けや雲路の
ほととぎす空ゆく月の跡をたづねて」(『道助法親王家五十首』夏・

三二四・隆昭)等がみえる。

⑤をのかさ月―俊頼の「ほととぎすおのがさ月の空ならば所もわか
ずしたりがほなれ」(『散木奇歌集』第二・夏部・五月・二二二)が
初例。勅撰集では、良経の「ほととぎすいまいく夜をかちぎるらむ
おのが五月のありあけのころ」(『新勅撰和歌集』巻第三・夏歌・一
七六、『正治初度百首』出詠歌)と「けふここに声をばつくせほとと
ぎすおのがさ月ものこりやはある」(『新勅撰和歌集』同・一七七・
祐盛法師、俊頼男)がある。当該「五月郭公」題では、五首に「を
のか五月」が詠み込まれている。なお、良経には他に「ときしあれ
ば花ちるさとのきのあめにおのが五月の鳥の「こゑ」(『千五百番
歌合』夏一・三百六十二番左・七二二)、「ほととぎすおのがさ月の
くれしよりかへるくもぢにこゑうらむなり」(『秋篠月清集』西洞隠
士百首・夏廿首・六三六)もあり、本歌合における「をのか五月」
表現の重用と良経の歌との関係は興味深い所である。

⑥みゝにとまり侍る―本来は詞や続き具合が耳障りなことを指す評
語だが、当該例では積極的な評価語として用いられている。両首が
郭公の鳴き声を詠んでいることを踏まえた判詞冒頭「いつかたと聞
わかれ侍らねと」に照応する表現か。

【通釈】

二十九番

左(歌)

権大納言(藤原)通忠

橘(の花の香り)が匂ってくる(時期である)五月の郭公よ、(お

前が今頃)どんなに恋い慕っている昔なのだろうか。

右(歌) 勝

権大納言(藤原)実雄

ずっと長く鳴き続けよ、雲の立ちこめた空を飛ぶ郭公、今またお
まえの(天下である)五月がきたぞ。

「判詞」左右のほととぎすはどちら(が良いか)と聞いて(すぐに
は)判断できませんが、「いかにしのふる」というよりは、「いまは
たをのか」といつているのは、一段と印象的でしょう。

〈三十番〉

廿番

左(歌)

権大納言定雅

つれもなき月をまつとて時鳥なくか涙の五月雨の空

右

権大納言公相

今よりはまたてやきかん時鳥鳴ふるしつる五月雨の比
つれもなき月を有明の空にみならひて侍る

にや、五月雨のゆふにまたる月はすくさすや
とそみえ侍る、下句も例のさしてそれとは

おほえ侍らぬか、みたる心ちし侍れとも、かやう
の事はさのみこそ侍れ、今よりはつたかふへくも
侍らぬにや、いつれもおほつかなき所侍れは、しは

【校異】

イ 持―ナシ(書)、勝(内) ロ か―は(書)、や(永)

ハ 涙の―涙(内) ニ つる―たる(支) ホ 比―空(永)

へ ナシ―左(書) ト を―ナシ(書)(永) チ みならひて―

みならひ(内) リ 侍るにや―侍るかや(支) ヌ ゆふ―ゆへ

(書)(永)(内)(支) ル またる―侍らは(書)(永)、侍る

(内)、侍る(支) ヲ すくさすや―すくさはや(永) ワ 侍る

―侍か(支) カ は―も(支) ヨ 心ちし―こちして(永)

タ 今よりはうたかふへくも侍らぬにや―いまよりはたかふへくも

侍らぬにや(聚)、
いまよりはまたてやきかむと侍になきふるしたる

とてはうたかふへくも侍らぬにや(書)、いまよりはまたてやきかん

と侍になきふるしつるとてはうたかふへくも侍らぬにや(永)

レ 為持歎―持歎(内)、■持(支) ※■は判読不能

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【語釈】

①つれもなき月―見えない月を「つれなき」と見立てる。「五月雨の

月はつれなきみ山よりひとりもいづる郭公かな」(『老若五十首歌合』

夏・七十三番左・一四五・藤原定家、『新古今和歌集』卷第三・夏歌

・二三五)等が、五月雨と郭公の組み合わせにおける先行例。

②涙の五月雨の空―雨を涙に見立てる例は多い。「さみだれののきの

しづくはほととぎすなくや五月のなみだなりけり」(『千五百番歌合』

恋一・千二百二十八番左・二二五四・慈円)等は、特に五月雨と涙を

組み合わせた先行例。なお、為家は「いとどしくかわかぬ昔の袂か

なふるもなみだのさみだれの比」(『為家集』上・四五二)等と詠ん

でいる。

③鳴ふるしつる五月雨の比―五月雨の時候を郭公の鳴き古す頃とし

たもので、為家に「あやにくにまたれしかどもほととぎすききふる

さるる五月雨の空」(『為家集』上・三一六)、「いたづらにききふり

にけりほととぎすなくや涙のさみだれの空」(『為家集』上・四四五)

等の類例がみえる。なお、当該歌の「ふる」には、「五月雨のふりぬ

るこゑもほととぎすあかやそらになほまたるらむ」(『実材母集』・

一〇四)等の如く、「(五月雨が)降る」意も響くか。

④つれもなき月を有明の空にみならひて侍るにや―良経の「有明の

つれなく見えし月はいでぬ山ほととぎす待つよながらに」(『新古今

和歌集』卷第三・夏歌・二〇九)を念頭に置いたものか。良経歌は、

「有あけのつれなく見えし別より暁ばかりうき物はなし」(『古今和

歌集』卷第十三・恋歌三・六二五・壬生忠岑)を本歌取りした詠で、

『千五百番歌合』出詠歌(夏一・三百三十二番左・六六二)でもあ

る。これらを踏まえた為家は「つれもなき月」を「有明の月」と結

びつけて解していると思しい。

⑤五月雨のゆふにまたる月はすくさすやとそみえ侍る―難解。「ゆ

ふ」を諸本の「ゆへ」に改めた上で、試みに解せば次のようになろうか。直前の判詞に拠れば「つれもなき月」には「有明の月」の意が響いており、五月雨のせいで一晩中待たれた月は有明の月であっても見過ごさないという風に解される。なお五月雨と月と郭公の組み合わせとしては、「五月雨の月はつれなきみ山よりひとりもいづる郭公かな」〔語釈〕①既出、「五月雨の雲まの月のはれ行くをしぼし待ちける時鳥かな」〔新古今和歌集〕卷第三・夏歌・二三七・二条院讀岐)等がみえる。

⑥今よりはうたかふへくも侍らぬにや―これも難解。書陵部本「いまよりはまたてやきかむと侍になきふるしたるとてはうたかふへくも侍らぬにや」に拠って試みに通釈する。

【通釈】

三十番

左(歌) 持

権大納言(藤原) 定雅

つれない月を待つといつて時鳥は鳴いているのであろうか。郭公が流す涙が降っているかのような五月雨の空(の下)。

右(歌)

権大納言(西園寺) 公相

時鳥が鳴き古す五月雨の頃ともなればこれからは待つこともなく(その声を) 聴こう。

〔判詞〕「つれもなき月」を「有明の空」に見慣れているせいでしょか。五月雨が降る(せいで) (今か今かと) 待たれる月は見過ごさないという風に解されます。下の句も例によってどの歌が特にそれだ

とは覚えておりませんが、既にどこかで見た心地がいたしますもの、こういったことはそんなものでございませう。「今よりはまたてやきかん」とございますのに(下の句で)「鳴ふるしつる」というのでは(論理上の齟齬を)疑うべくもございせん。両歌とも(表現上)はつきりとしないとところがございますので、ひとまずは持とすべきでしょう。

〈三十一番〉

卅一番

左(歌)

権大納言公基

人しれすまたれし物を五月雨の空にふりぬる時鳥哉

右(歌)

為教朝臣

きかぬまの心つくしの時鳥さ月の空はまたれさりけり

左優に侍るめり、右またれさりけりといへる、

おもひ所なく侍れば、尤可負、

【校異】

イ 勝―ナシ(書) ロ ナシ―続後撰、夏(聚)、続後撰(永)

ハ 右―左(内) ニ れ―袖(内) ※「袖」は「禮」を書き誤っ

たものか ホ おもひ―おもひ(書) (永) ヘ 可―為(書) (永)

【他書所伝】

〈左歌〉

『続後撰和歌集』卷第四・夏歌・二〇一

権大納言公基

人しれずまたれしものを五月雨のそらにふりぬるほととぎすかな

『題林愚抄』第五・夏部上・二〇六八

(前後撰)
同

権大納言公基

人しれずまたれしものを五月雨の空にふりぬる郭公かな

〈右歌〉ナシ

【語釈】

①五月雨―書陵部蔵本では「五月雨」を「梅雨」と表記する。

②ふりぬる―五月雨の「降る」と郭公が「鳴き古す」意の掛詞。「五月雨のふりぬるこゑもほととぎすあかはやそらになほまたるらむ」

『美材母集』一〇四)等が類例。

③心つくしの時鳥―視点人物が郭公を心待ちにしている様。「待ちしより心づくしのほととぎすしばしとどめよもじの関もり」(『月詣和歌集』第三卷・羈旅部・二四四・賀茂資保)、「今も猶心づくしの郭公おなじ鳴く音をまたれずもがな」(『洞院撰政家百首』上・夏・三九一・少将)等の先行例がみえる。

④おもひ所なく―書陵部本等には「おもふところなく」とあり、「思ふところなきにあらざれば、右すこしはまさり侍らむ」(三十八番判詞)、「おもふ所なきにあらざ侍るにや」(七十二番判詞)等、「おも

ふ所」が当該歌合で肯定的に用いられる例が見い出せる。ここでは視点人物や判者の感懐の意ではなく、歌う対象への思いやりと解する。

【通釈】

三十一番

左(歌) 勝

権大納言(藤原)公基

(卯月には)人知れず待たれたのに(五月になって)五月雨が降る空に鳴き古し(聞き古され)た郭公であるよ。

右(歌)

(藤原)為教朝臣

(ずつとほととぎすの声を)聞かない間、心を砕いて待ちに待った郭公よ、五月の空にあつては(すつかり)待つ気もなくなってしまうことだよ。

〔判詞〕左(歌)は優美でございましょう。右(歌)は、「またれさりけり」といつているのが、対象(郭公)への愛情がございませんで、当然負けです。

〈三十二番〉

卅二番

左

中納言為経

立_レ帰り今もなかなん時鳥をのかさ月の去年の古声

右脇

信実朝臣

郭公かたまつよりもまたれけりをのかと思ふさ月きぬれば

左立かへりといへるよりふる声まで、珍しき事は

聞え侍らぬにや、右ことなる事は侍らぬ共、我が

心よりよみ出したる哥とみえ侍れば、右勝と申へし、

【校異】

イ 立―おち(書)(永)、たち(聚)、立(支) 口 勝―ナシ(書)

(内) ハ かた―はた(書) ニ 立―おち(書)(永)(支)

ホ より―よりは(永) ヘ 右―右は(支) ト 侍らぬ―聞え

侍らぬ(書)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉

『題林愚抄』第五・夏部上・二〇七五

同

信実朝臣

時鳥かたまつよりもまたれけりおのがと思ふさ月きぬれば

【語釈】

①立帰リ―もとあつた状態に戻る、昔の状態に戻る意。『家持集』に

「ほととぎすみやこへゆかばたちかへりいまきぬべしといもにつげ

よく」(夏歌・六六)とあり、この場合、もといた場所に戻る意。当

該歌は時鳥が鳴き始めた頃に戻って、あるいは何度ももとに戻って

繰り返し鳴いてほしいというように幅広く解釈できようか。一方、

当該箇所には「をちかへり」という異同がある。「をちかへり」の場

合、時鳥に何度も繰り返し鳴いてほしいという意になる。「をちかへ

る(復返)」には若返るといふ意があるので、結句の「去年の古声」

との対応を考えると、「をちかえり」の方が表現的に妙味があるか。

用例としては「をちかへり」の方が多く「郭公をちかへりなけうな

ぬこがうちたれがみのさみだれのそら」(『拾遺和歌集』巻第二・夏

・一一六・凡河内躬恒)、「ゆふづく日いればをぐらのやまのはにを

ちかへりなくほととぎすかな」(『江帥集』夏・五三)等散見する。

ここでは「立帰リ」で解釈しておく。

②去年の古声―去年と変わらない郭公の鳴き声という慣用表現。『古

今和歌集』の「さ月まつ山郭公うちはぶき今もなかなむこぞのふる

」(『多』(巻第三・夏歌・一三七・よみ人しらず)が代表的な例であ

るが、当該歌は傍線部で語句の一致がみえる。

③かたまつ―ひたすら待つ意。「うぐひすはいまはなかむとかたまで

ばかすみたなびぎつきはへにつつ」(『万葉集』巻第十七・四〇五四)、

「いもにあはんよをかたまつとひさかたのあまのかはらに月はへに

けり」(『家持集』二二一)、郭公かたまつよひの山の端にさもあら

ぬ月にはやいでにけり」(『正治後度百首』夏・郭公・五一六・源家

長)等が先行例。「かたまつ」は郭公、「またれけり」は視点人物の

行為として二つに分けて解する方向もあるか。

④我か心よりよみ出したる哥―いかにして思ひしらせむ時鳥おい

〈三十三番〉

はつるまであかぬころを」『今撰和歌集』夏・五七・藤原公重、
「まちつけてことしもききつほととぎすおいはたのみのなきみなれ
ども」『頼輔集』二二〇等、老境に入りなお郭公の声を待ち遠しい
と詠む例がみえる。詠者信実は、宝治元年時点で七十歳を越えてお
り、為家は当該歌に信実自身の心情を読み取った上で判を付したも
のか。

【通釈】

三十二番

左(歌)

中納言(藤原)為経

もう一度もとに戻って、今すぐにも鳴いてほしい時鳥よ、お前
が(盛んに)鳴いた去年の昔のままの声で(よいから)。

右(歌) 勝

(藤原)信実朝臣

郭公よ、(お前の鳴くのが)ひたすら待つというよりもっと待たれ
てならないことだ。(お前が)自分の時と思う(はずの)五月が来た
ので。

【判詞】左(歌)は「立かへり」といつている(ところ)より「古
声」まで、珍しいと思うようなことはございません。右(歌)も特
別なことはございませんが、自分の心より詠み出している歌と見え
ますので、右を勝ちと申そう。

卅三番

左ナシ

右衛門督通成

時鳥わきていつとはおもはぬにをのかさ月と今はなく也

右

左近中將雅光

さ月山月まつよひの村雨にふり出てなくほととぎす哉

右ナシ 哥またしとおもへはむらさめの空といへる近き

世の哥より、ほととぎすにはかならず村雨そふへき

事に侍りにたり、五月雨すへき比さへむら雨いかゝ

と覚え侍るを、左歌わきていつとはおもはぬにと

いへるも、ほととぎすすに心いらぬやうに聞えて、

ほいなくや侍らん、持にて侍るへきにや、

【校異】

イ 持—ナシ(書) □ 左近中將—右近中將(聚)(書)(内)(永)、

左近衛中將(支) ハ 右—左(内) ニ 侍り—なり侍(聚)(書)、

成侍り(永)、なり侍る(内)、なり侍り(支) ホ ほととぎす—

時雨(支) へ—には(永) ト やう—さま(書)(永)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【語釈】

①わきていつとはおもはぬに―わきては、「時しらぬ富士の山へのほととぎす」いかで五月をわきて鳴くらむ」〔洞院摂政家百首〕上・夏・三七九・藤原光俊朝臣）等の如く、時期を識別する意。当該歌の場合、郭公とは対照的に視点人物は五月の到来を特に意識していないとする。

②さ月山―五月の頃の山を指す。五月山と郭公の取り合わせは、「さつきやまうのはなづくよほととぎすきけどもあかずまたなかぬかも」（巻第十・夏雑歌・一九五七）、「さつきやまはなたちばなにほととぎすこもらふときにあへるきみかも」（同・一九八四）等の如く早くは『万葉集』にみえる。

③村雨―にわか雨。郭公と村雨の組み合わせは、勅撰集では「心をぞつくしはてつるほととぎすほのめくよひの村雨のそら」（『千載和歌集』巻第三・夏歌・一六七・藤原長方）が早い例。中世には村雨と郭公の取り合わせは多くみえる。

④ふり出て―声を高く張り上げる意。加えて村雨が「降る」意と郭公が山から飛び立つ「出づ」の意が響く。「むめの花ちるてふなへにはるさめのふりいでつつなくうぐひすのこゑ」（『伊勢集』三三二六）、「入日さすゆふくれなるのこのまよりふりいでつつなく山ほととぎす」（『御裳濯和歌集』巻第四・夏歌・二二五・大中臣公長）等が類例。

⑤またしとおもへはむらさめの空といへる近き世の哥―「いかにせ

んこぬよあまたの時鳥またじとおもへばむら雨の空」（『新古今和歌集』巻第三・夏歌・二一四・藤原家隆）を指す。

⑥ほととぎすにはかならず村雨そふへき事に侍りにたり―家隆詠は『家隆卿百番自歌合』（十八番右・三六）所収歌で、詞書に「私詠建久五年」とみえる。郭公と村雨の取り合わせ自体は【語釈】③に掲げた千載集所収歌や、「うらめしやまたれまたれて時鳥それかあらぬかむらさめの空」（『拾遺愚草』上・二見浦百首・夏・一二四）等の先行例があるが、「軒ちかくしばしかたらへ時鳥雲よく夜ひのむらさめの空」（『後鳥羽院御集』二二九）、「あしびきのやまほととぎすひとこゑもそらしづかなるむらさめのくも」（『明日香井和歌集』下・一六七）等、他の新古今歌人の詠はいずれも家隆詠より後のものである。なお、家隆詠は『自讃歌』にもとられた。

⑦五月雨すへき比さへむら雨いかと覚え侍る―初句に「さ月山」とあるのに村雨と詠みこんだ点を、五月の長雨の時候に村雨はそぐわぬとして難じたもの。夏の村雨の用例には「夏ふかみ庭も葉びるの玉がしはしぐれとならず夜はのむら雨」（『夫木和歌抄』巻第九・夏部三・三七五〇・後鳥羽院）等もみえる。

⑧ほととぎすに心いらぬやうに聞えて、ほいなくや侍らん―視点人物が五月の到来を意識しないことが、郭公への無関心に繋がるように聞こえ、題にそぐわないことを咎めたもの。九十二番（「逢不遇恋」）では、小宰相詠「したの帯のあだにむすびし中なればめぐりあふべき限だになし」について、「下句かぎりだになしとて、恋のこころい

まはおもひすてたるやうにみえ侍る、題の本意侍らねば、尤為負」とする。

【通釈】
三十三番

左(歌) 持

右衛門督(源)通成

郭公の声を聴くのは特にいつがいいとは思っていないのだが、郭公の方は「をのが五月」とばかりに今は鳴いていることだ。

右(歌)

右近中將(源)雅光

五月山で月を待つ宵にあいにく村雨が降り出した、けれど雨の中に飛び出して声を振り立てて鳴いている郭公であるよ。

〔判詞〕右歌は「またしとおもへはむらさめの空」と詠んでいる近い時代の歌から、「ほととぎす」には必ず「村雨」を付け加えることになってしまっているようです。五月雨が降るはずの頃に(五月雨といわずに)村雨(というの)はさあどうであろうかと思われます。(けれど)左歌の「わきていつとはおもはぬに」と詠んでいるのも、郭公に十分に心を寄せていないように聞こえますので、甲斐のないことでごさいます。 (どちらも欠点があつて) 持とするべきでしょうか。

〈三十四番〉

卅四番

左^イ 荆

兵部卿有教

さみたれの空にそあかぬ時鳥卯月の比にまち習ひつゝ、
右 弁内侍

まてといふになかすもあらは時鳥なにをさ月とおもひわかまし
左古詞^③おほく^ハ聞えて、よろしきすかたには侍るを、
その心たしかにおもひわかたく侍るを、左題^ト
五月本意なく侍るにや、又可為持、

【校異】

イ 持—ナシ(書) □ なに—いつ(聚) ハ 左古詞—右ふる

きこと葉(書)(永)、左右詞(聚)(内)(支) ニ おほく—ナシ

(聚) ホ おもひ—ナシ(永) ヘ 侍るを—侍に(書)、侍り(永)

ト 題—題の(書)(永) チ 侍るにや、又可為持—やさみたれう

月もいかゝとみえ侍へしふるくは山みねひる日なとをもとかめたる

ことも侍にやなをいつれと申かたし(書)、侍るにや又可持(聚)(支)、

や又五月雨卯月もいかゝと見え侍へしふるくは山みね夜ひるなどを

もとかめたる事も侍にや猶いつれと申かたし(永)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〔右歌〕ナシ

【語釈】

①まぢ習ひつゝ―「待つ習わしになる」意。「あぢきなくつらきあらしのこゑもうしなどゆふぐれにまぢならひけん」(『新古今和歌集』卷第十三・恋歌三・一一九六・藤原定家)は一例。

②まてといふに―直後の詩句と呼応し、「待てと言えばくする(しな)い)のならば」の意で用いられる。「まてといふにちらでしとまる物ならばなにを桜に思ひまさまし」(『古今和歌集』卷第二・春歌下・七〇・よみ人しらず、『古今和歌六帖』第六・四一九七・素性、『素性集』一〇)が代表的な先行例で、右歌は古今集歌を踏まえたものと思しい。

③古詞おほく聞えて―「古詞」は古歌の詞。右歌と【語釈】②既出の古今集歌が似通っていることを指す。判詞において古詞の多さに触れる先行例として、『三井寺新羅社歌合』九番に「されどふるぎ詞おほし、初めて勝とも申しがたし、持なるべし」とみえる。俊成は古詞の多用に否定的とも見えるが、同時に「左歌、詞存古風興入幽玄」ともあり、古歌の利用は状況により評価が異なることが伺える。為家は、「よろしき姿」と、その使用に一定の評価を与えつつも、古詞が有効に機能せず、却って歌意が難解になったことを批判している。

④題五月本意なく侍るにや―題の「五月」に対し「五月雨」「卯月」

の両語を用いることの是非をいうか。

⑤本意なく侍るにや、又可為持―書陵部本・永青文庫本には、この前後に大異があり、底本は本文の脱落・改変を経たものと見られる。書陵部本によると、「さみたれう月もいかとみえ侍へし」とし、その論拠として「山みね」「ひる日」の例を挙げる。兩例はそれぞれ『亭子院歌合』二月(三・四番歌)判詞、『高陽院七番歌合』秋・一番判詞における歌中での同義語使用(「同心病」)を難じたもので、『俊頼髓腦』、『和歌童蒙抄』、『袋草紙』をはじめ多くの歌学書も歌病の実例として引いている(但し、歌病としての認定には歌学書によって差異がみえる)。当該判詞においては、文脈からみる限り為家は「五月雨」「卯月」をほぼ同義と捉えており、「五月」の「本意なし」と評したのもこれに関わるものであろうか。

【通釈】

三十四番

左(歌)持

兵部卿(源)有教

五月雨の空の下でもなお聞き飽きることのない時鳥(の声)であるよ、四月のころから(それを)待つのが習慣になつてしまつてい

るのだ。

弁内侍

待てといえば鳴かずにいるというのなら、時鳥よ、なにを(もつて)五月の到来と判断すればよいのだろうか。

〔判詞〕右(歌)は古歌の詞が多くあつて、姿は悪くないのですが、

歌意ははっきりと理解し難く存じますものの、左(歌)は題の「五月」の本意から外れておりますでしょうか。又持とすべきである。

〈三十五番〉

卅五番

左^イ 刺

徒に初音程ふる時鳥まつとせしまに五月きにけり

右

雅忠朝臣

時鳥忍ひし程の一声を今はさ月になきやふるさん

左右共に心詞させる無得失待れは、為持、

【校異】

イ 持—ナシ(書) 口 右近中将師繼—右近—○師繼師つく古本

(永)、右近衛中将師繼(支) ハ ナシ—続古、夏、(聚)

ニ に—と(書)(永) ホ さん—らん(永) ヘ ナシ—猶(永)

【他書所伝】

〈左歌〉

『題林愚抄』第五・夏部上・二〇七六

(至原)

師繼卿

いたづらにはつね程ふる時鳥待つとせしまに五月きにけり

〈右歌〉

『続古今和歌集』卷第三・夏歌・二二七

(宝治元年十首の歌合に、五月郭公)

中宮大夫雅忠

ほととぎすしのびしころのひとこゑをいまはさつきとなきやふりなん

『題林愚抄』第五・夏部上・二〇六九

続古

雅忠

時鳥忍びしころの—こゑを今はさつきとなきやふりなん

【語釈】

①初音程ふる—「初音程ふる」は初音を聞いて以来二度と聞かないまま時間が経ったととるか、初音を聞こうとして聞かぬまま時間が経ったというのか、俄には判断し難い。ここでは一応前者で解しておく。

②まつとせしまに—時鳥の鳴く声を待っている間にの意。「夜深待郭公」ほととぎすまつとせしまにふしまちの月こそたかくそらになりぬれ」(『在良集』・五)、「郭公まつとせしまに我が宿の池の藤浪うつろひにけり」(『老若五十首歌合』夏・五十九番左・一一七・藤原家隆)等が先行例。

【通釈】

三十五番

左(歌) 持

右近中将(藤原) 師繼

初音を聞いた後徒に時間ばかりが過ぎてしまった郭公、(次の声を)

待っている間にもう五月にもなってしまったことだよ。

右(歌)

(源) 雅忠朝臣

郭公がまだ忍び音に鳴いていた頃の一声を、今は五月になって鳴き古してしまふことだろうよ。

〔判詞〕左右共に意味するところや表現にこれといった長所も短所もありませんので、持とする。

〈三十六番〉

卅六番

左

沙弥蓮性

時鳥いかてあやめに引そへてなかなくねをも玉にぬかまし

右

下野

五月雨のふりにし友とかたらへばなれもこととふ時鳥かな

左さまよろしく侍るを、下句を讀上侍らぬほど、

いかに侍るへきにかと聞ゆる所にや侍らん、右ふ

りにし友とかたらへばなれもこととふといへる、心か

よへるところさるかたも侍りなんとて、さのみはいかんと

おもふ給へなから、又勝の字をつけ侍りぬ、

【校異】

イ なかなく―なるゝ(聚) (支) □ 勝―ナシ(書)

ハ 左さま―左うたさま(書) (聚) (永)、左右様(内) (支)

ニ ほと―ほとは(永) ホ にや―ナシ(書)、や(永) へと

―など(書) (永) ト おもふ給へ―思給(書)、思ひ(永)、おも

ふたとへ(内)、思ふたま(支) チ 又―右(支)

【他書所伝】

〈左歌〉

『題林愚抄』第五・夏部上・二〇七七

同

蓮性

ほととぎすいかであやめに引きそへてなかれしねをも玉にぬかまし

〈右歌〉

『題林愚抄』第五・夏部上・二〇七八

同

下野

五月雨のふりにし友とかたらへばなれもこととふほととぎすかな

【語釈】

①あやめに引そへて―菖蒲は根や葉等に芳香があることから邪気を

払うものとされ、端午の節句には葉を屋根に葺いたり、根を贈り物

とした。郭公の音を添えるという意と共に、「引く」に菖蒲の根を引

く意が響く。

②なかなくねをも玉にぬかまし―玉は端午の節句に邪気を払う為に

飾る薬玉のことで、沈香等の薬を玉にして錦の袋に入れて菖蒲等で

飾り付け五色の糸を長く垂らしたもの。「ね」は、郭公の音と菖蒲の根との懸詞。郭公の声を葉玉に飾ろうとする趣向は、「ほととぎすいたくなきそながこゑをさつきのたまにあへぬくまでに」（巻第八・夏雑歌・一四六九・藤原夫人）、「ほととぎすまでどきなかずあやめぐさたまにぬくひをいまだとほみか」（巻第八・夏雑歌・一四九四・大伴家持）等、既に『万葉集』にみえる。

③五月雨のふりにし友―「ふり」は、「（五月雨が）降る」と「旧友」の懸詞。当該歌合の判を不服として奏上された『蓮性陳状』は、『洞院撰政家百首』出詠歌「さみだれのふることもをかたり出でてのどかなる夜の友ぞうれしき」（上・夏・四七四・源家長）との類似を指摘する。また「ふりにし」と過去の時制となっている点から「六月の郭公ともや聞え候ぬらん」と指摘する等、右歌の種々の難点を述べている。

④下句を讀上侍らぬほと、いかに侍るへきにかと聞ゆる―上の句の真意が下の句を詠み上げないと理解されないことを難じたもの。これに対して、『蓮性陳状』では、そのような仕立ての歌は古来より多くあるとし、当該歌合出詠歌「わけしよの契も消えてかなしきはとへどこたへぬみち芝の露」（九十三番右・俊成卿女）を引き合いに出す。

⑤心かよへるところさるかたも侍りなん―「ふりにし友とかたらへは」と「なれもこととふ（時鳥）」は、どちらも心が通じ合っている者同士の意味で、こういうこともきつとあるだろうの意。

⑥さのみはいかと―蓮性と下野の番が、「早春霞」「山花」と二題続けて下野の勝ちとなっていることを指す。

【通釈】

三十六番

左（歌）

沙弥蓮性

時鳥よ、どうにかして菖蒲（の根）を引くのに加えて、お前の鳴く音までも（端午の節句の）葉玉に通したいものだ。

右（歌） 勝

下野

五月雨が降った日に訪ねてきた旧友と語っていると、お前も私に声をかけてきたんだね、時鳥よ

〔判詞〕左（歌）は一首の趣はよいのですが、下の句を讀み上げません内は、どんな風であろうかと思われる所がございましょう。右（歌）は「ふりにし友とかたらへはなれもこととふ」と言うのは、（どちら）も心が通じ合っている者同士でこういうこともきつとございませうということ、そればかりではどうであろうかと存じます、又（下野詠に）勝の字を付けました。

〈三十七番〉

卅七番

左 關

為氏朝臣

あやにくに初音またれし時鳥さ月はのか時となくなり

右

少将内侍

なげやなけ初音おしみし時鳥今こそ夏は五月なりけれ

兩首いづれとわきかたく侍るを、立帰りよくみ

侍れは、なげやなけといへるよりはをのか

時となくほととぎすは聞所侍るへきにや、題の心

はかりに、かちと申侍るなり、

【校異】

イ 勝―ナシ(書) ロ ナシ―新拾、夏(聚) ハ なり―なる

(聚)(内)(支) ニ なげや―なくや(内) ホ けれ―けり(内)

へ いづれと―いづれも(聚)(内) ト よく―ナシ(書)(永)

チ 侍れ―侍る(支) リ なげや―なくや(内) ヌ は―ナシ

(支) ル にや―や(支) ヲ 題の―題(書)

【他書所伝】

〈左歌〉

『新拾遺和歌集』卷第三・夏歌・二七二・藤原為氏

宝治元年十首歌合に、五月時鳥 前大納言為氏

あやにくに初音またれし時鳥さ月はおのが時となくなり

『題林愚抄』第五・夏部上・二〇七三

新拾 宝治三十首歌合

(右大将通忠)

あやにくにはつねまたれし時鳥さ月はおのが時となくなり

〈右歌〉ナシ

【語釈】

①あやにくに―原義は、ああ憎いと思われるさま。ここでは、無性に郭公の初音が待たれることをいう。為家に「あやにくにまたれしかどもほととぎすききふるさるる五月雨の空」(『為家集』上・夏・寛元元年独吟十首・三一六)という先行例がみえる。

②なげやなけ―郭公に盛んに鳴くよう呼びかけたもの。「なげやなけたか田の山の郭公このさみだれにこゑなをしみそ」(『拾遺和歌集』卷第二・夏・一一七・よみ人しらず)、「なげやなけ山ほととぎすはるくれてものさびしかるきかくれに」(『長能集』六九)、「なげやなけならのをがはのほととぎすおのが五月はこゑもをします」(『重家集』一一四)等が先行例。

③聞所―「なげやなけ」「をのか時となく」という兩首の表現に事寄せて歌の優劣を「聞所侍る」と表現したもの。当該歌合九十二番判詞でも、左歌の小宰相詠「あかしかねまたるる物と成りにけりさしもいとひし鳥の八こゑも」について、「左さしもいとひし鳥の八こゑ、またるる物になれるところ、ききどころおほくゆゑふかくおもひひれられて」と評価する。

【通釈】

三十七番

左(歌) 勝

(藤原)為氏朝臣

無性に初音が待ち遠しかった時鳥、五月ともなると自分の季節であるとはかりに鳴いているのが聞こえるよ。

右(歌)

少将内侍

鳴けや鳴け、初音をおしんでいた時鳥よ、今まさに夏の中でも(郭公が盛んに鳴く)五月になったのだから。

「判詞」両首のどちらが(すぐれているか)と判定しにくいこと
でございしますが、繰り返しよく読んでみますと、(郭公に)「なげやなげ」と言うよりは、「をのか時」と鳴く郭公(の方)が聞き所があると申すべきでしょう。題意(をよく汲んでいる点)くらいで、(左歌を)勝と申します。

〈三十八番〉

卅八番

経朝朝臣

左

たか^①為に里はあまたの時鳥をのかさ月と猶忍ふらん

右

沙弥禅信

名にしおふやみはあやなし時鳥をのか五月は声もかくれす

左の里はあまたこそ何のよせとも聞え侍らね、

右梅の花色みえぬ事をおもひ出て、五月やみに

よせて名にしおふといへる、思ふ所なきに

あらされは、右少まさり侍らむ、

【校異】

イと一を(書)(永)　口勝ナシ(書)(内)　ハのナシ

(永)　ニよせよう(書)(永)、余所(内)(支)　ホ右ナシ

シ(内)　へ梅の花色梅のはな色こそ(聚)、梅花色(永)(内)、

梅花の色(支)　トおふほふ(書)　チ思ふナシ(内)

リ　あらされは—あらず侍れは(支)　又少—すこしは(書)(聚)

(永)(内)　ル侍らむ侍らん(永)、侍へらん(内)

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ　〈右歌〉ナシ

【語釈】

①里はあまたの時鳥—「ほととぎすながなくさとのあまたあれば猶うとまれぬ思ふものから」(『古今和歌集』卷第三・夏歌・一四七・よみ人しらず、『伊勢物語』第四十三段)の如く、鳴き声を待ち遠しく思う視点人物とは対照的に時鳥には鳴く人里が数多あることを言う。

②をのかさ月と—書陵部本等の「をのかさ月を」だと(おのが五月にもかかわらず)という意となり一首全体の意味の流れも自然である。底本の「をのかさ月と」では書陵部本等のような意味ではとれないので「をのかさ月を」で解した。

③名にしおふやみはあやなし—『古今和歌集』所収「春の夜のやみ

はあやなし梅花色こそ見えねかやはかくるる」(巻第一・春歌上・四一・凡河内躬恒)を踏まえた表現。

④何のよせ—何の理由もの意。「たか為に」「をのかさ月と猶忍らん」という前後の表現の中で、敢えて「里はあまたの」とする必然性に欠けることを指すか。

⑤梅の花色みえぬ事をおもひ出て—【語釈】③既出古今集歌を念頭に置いた評。

⑥思ふ所なきにあらされは—難解。歌の情趣が深いことをいうか。或いは詠者の感懐が託されていることを指摘するか。ここでは仮に前者で解しておく。

【通釈】
三十八番

左(歌)

(藤原) 経朝朝臣

尋ねていく里はたくさんある郭公なのに、一体誰の為に己の五月であるというのに、依然として(声を)忍んでいるのであろうか。

右(歌) 勝

沙弥禅信

(古来) 著名な關は(五月にあつては全く) 訳が分からないことだ、郭公は己が五月ともなると五月關の中でも声は隠れないから。

【判詞】左の「里はあまた」というのこそどうしてそれを持ち出すのか判りません。右は(古歌の) 梅の花の色の見えないことを思い出して、五月關にことよせて「名にしおふ」といつている、風情の感じられる点がなくもないので、右が少し勝っているでしょう。

〈三十九番〉

卅九番

左 關

越前

庭にちる花橘の五月雨に声はしほれぬほととぎす哉

右

前権大納言為家

身を歎く涙は時もわかれぬに五月ときなく時鳥かな

声はしほれぬといへる心、聞ふるしたることに

侍れ共、さ月ときなくほととぎす、題のこころを

もつて下旬に取あつめて、いふかひなく侍るうへに、

身をなげくといへる、まつうけられす侍れは、

左かちとこそ申侍らめ、

【校異】

イ 勝—ナシ(書) 口 前権大納言為家—権大納言為家(聚) (内)

(支)、為家(永) ハ 身を歎く—身はなけて(書)、身をなけて

(内) ニ ときなく—時なくき敷(支) ホ 声は—左声は(書) (内)

へ 心—ナシ(書) ト さ月—右五月(書) (永) チ ときなく

—時なく(支) リ 題のこころ—題心(書) (内)、題(支)

又 をもつて—ナシ(書) (聚) (永) (内) (支) ル 下旬に—しも

の句に(書) ヲ なげくと—なけてと(書) (内)、なけて(支)

ワ 左—左を(支) カ こそ—こそは(書) ヨ らめ—へらめ

(永)

※ハについて、書陵部本には「身はなけて」とあるが、書陵部本を底本とする「新編国歌大観」は「身をなけて」とする。

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ

〈右歌〉

『題林愚抄』第五・夏部上・二〇七九

(宝治歌合)

為家卿

身をなげくなみだは時も別れぬにさ月ときなく時鳥かな

『為家集』夏・五月郭公・三四八

宝治元年仙洞十首歌合

身をなげく涙は時もわかれぬにさ月にきなくほととぎすかな

【語釈】

①声はしほれぬ—「はるさめはふりしむれどもうぐひすのこゑはしほれぬ物にぞありける」(『金葉和歌集』二度本・巻第一・春部・一六・源俊頼朝臣)が先行例としてみえ、当該歌はこれを踏まえていよう。新大系『金葉和歌集』脚注には「〇しほれぬ 春雨で湿った声が予想されるが、そうはならず透き通るような美しい声」とある。

②身を歎く—「身を歎く涙やたえずしぐるらんわきて色こきやどの紅葉葉」(『百首歌合』二百六十八番右・五三六・藤原伊平)等の例

がある。一方、「身をなけて」については、「おほみ川となせのたきに身をなけてはやくと人にいはせてしかな」(『千載和歌集』巻第七・雑歌中・一一四三・空人)、「みをなげてなみだやつゆにまがふらんあれのみまさるなでしこのはな」(『江帥集』四一四)等の例があるが、当該歌には不適切な表現であろう。

③わかれぬに—「わかる」は、判別する、区別する意。用例として「いづれともはなのほひはわかれぬになほしもつけのなつかしきかな」(『皇后宮歌合』一七)、「いつとだに憂き身は思ひわかれぬに見しに変わぬ春の明ぼの」(『夜の寝覚』巻四・四九・宰相の上)等があげられる。

④うけられす—「うく」はそれでよいと判断し容認する意。当該歌合百四番でも為家は自詠「我ばかり心ながさをかたるともみし夢とやはおもひあはせん」について「右の夢がたり、うけられず侍れば、また負け侍るべし」と判を付している。

【通釈】

三十九番

左(歌) 勝

越前

庭に花橘の花を散らせる五月雨にも、声は湿つぽくならない(で、よい声を聞かせる)時鳥だよ。

右(歌)

前権大納言(藤原) 為家

身の上を歎く涙は(いつものこと)どの時という区別はつかないが、(おのが)五月と(ばかりに)来鳴く時鳥よ。

「判詞」「声はしほれぬ」という趣向は、聞き古したことでもござい
ますが、「年月ときなくほるときす」は、題意を(皆)下句に取り集め
ていて、どうもつまらないことなごいます上に、「身をなげく」と
言うのも、(歌合の場の歌としては)はなっから受け入れ難うござい
ますので、右を勝とこそ言うへきでございましょう。